SDGs 目標11 住み続けられるまちづくりを

最近、まちへ出かけると感じることがある。高齢者向けの施設があちこちに建ち増えている、ということだ。「高齢社会」という言葉をよく目や耳にするが、僕の普段の生活からは、それほどお年寄りが多いとは感じない。しかし、近所の住宅地は築年数が経ち、多くのお年寄りが暮らしていると考えられる。

僕のまちは、僕にとって暮らしやすいが、高齢者にとってはどうなのだろうか…。そして、「ずっと住み続けられるまち」だろうか。僕は調査を始めた。

高齢者さんにとっての困りごとって何だろう？

外出
- 買い物
- 通院
- 料理
- 掃除
- ゴミ出し
- 相談の場がわからない

など
- 移動（特に坂道や階段）
- 病気やケガの不安
- コミュニケーションの場が少ない
- 生活の中の動作（立つ、座る、文字を読む）
- ひとり暮らしのさみしさや不安

生活に必要な様々な行為が難しくなり、引きこもりがちになる。すると、心身が衰え介護状態になったり、認知症が進んでしまったりする。これらのような、困りごとを解決すれば、高齢になっても住み続けられるのではないだろうか。

島根県の高齢化率は全国5位

34.5%だ！

つまり 島根県に住む人の34.5%が高齢者（65歳以上）ということだ。（ちなみに日本の高齢化率は28.9%　世界の中で1位だ　）

高齢化率が21%を超えると「超高齢社会」と呼ばれるので、島根県は「超・超高齢社会」と言えるのではないだろうか。

山、海、湖などの豊かな自然に恵まれている島根県。食べ物がおいしく、人があおらかであたたかい。そんな僕が生まれ育つ島根県は、

『長生きができるご長寿県だ～!!』

と胸を張って自慢したい。

出かけよう！ いつまでも好きなまちで自分らしく つながろう！

新聞づくりでお世話になった方

社会福祉法人「みずうみ」
法人本部 法人推進室　室長
（兼）公益事業部　部長
社会福祉士
岩本 千代さん

発行日
令和4年 8月24日
発行者
島大附属
鳥飼 逢生

Re hope（リ・ホープ）で気軽に出かけよう♪
～僕のまちが誇るグリーンスローモビリティ～

僕が住む地域（比津が丘、法吉、うぐいす台団地）には、ゴルフカートのような乗り物「グリーンスローモビリティ」が走っている。2019年、みずうみが主に高齢者のちょっとした移動や買い物を支援するために取り入れ、坂道の多い3団地内の運行をスタートさせた。Re×hope（再び希望を持って）という願いを込め、リホープの名前で地域に親しまれている。リホープは、予約に応じて、自宅から、運行エリア内のスーパーやドラッグストア、カフェ、郵便局、医院、ATM、バス停などへの送迎を行う。平日9:30～12:30までは、無料で利用できることに、僕はとても驚いた。昨年の取材で出会った高齢の利用者さんから聞いたのは、「運転免許を返納して困っていたけれど、リホープのおかげで出かけやすくなり、買い物や通院がしやすくなった。」「足が悪いけれど、玄関まで迎えに来てくれるし、優しいドライバーさんが荷物を運んでくれるから助かる。」「無料なので、経済的に利用しやすい。」といった喜びの声だった。

一番心に残っているのは、一人暮らしをしている89才の椎野尚さんとの出会いだ。リホープが運行している平日、椎野さんは毎日法吉団地入口にある「カフェ太郎」へランチに出かけている。配食サービスを利用して、自宅でひとりで食べるより、リホープのカを貸りて自分の足で出かけ、人に会って話し、人の中で食事をすることがうれしいと話してくださった。リホープは、自分の生活になくてはならないものだそうだ。椎野さんとの出会いは、僕に「人はいつまでも人と関わって暮らすことが生きがいにつながる。」という大切なことを教えてくれた。

「体調はいかがですか？」優しいドライバーさん。リホープは高齢者の見守りも兼ねている。

今日もカフェ太郎へ行ってきま～す！

リホープが走る僕のまち。
ずっと住み続けられるまちだと感じる。

リホープストアは地域のコミュニティ・スポット

八月九日、僕は高台にあるとなりまち淞北台団地へ取材へ出かけた。

みずうみは、毎週火・木曜日の二時から三時半まで「リホープストア」を開いている。この日は、カフェ太郎手作りの様々なお弁当、お惣菜、デザート、生活に必要な日用品などが並べられた。お店を手伝う三人のボランティアは、淞北台に住む高齢者さんだ。元気でイキイキと楽しそうだ。開店を知らせる音楽が団地に流れると、次々とお客さんがやって来た。一畑百貨店の移動販売車「うらら号」も到着し、肉や魚、牛乳などの生鮮食品を買うこともできる。リホープも、住民の送迎に大活やくだ。たくさんの人が協力して住民の買い物を支援していた。

「この団地は急な坂道が多いので、リホープの送迎サービスがとてもうれしいです。」「昔、ここに、何でもそろう商店があったのよ。お店がなくなった時は困ったけれど、今はリホープストアがあるので助かっています。」など、地域の人は話してくださった。ボランティアさんは、「一人暮らしなので、ここで人と関わり話せることがうれしい。喜んでもらえることが自分の喜びだし生きがい。大好きな仲間と、この団地でずっと暮らしたいです。」とおっしゃっていた。買い物だけでなく、会話に花が咲くリホープストア。交流生きがいの場だと思った。

いつまでも元気！ イキイキ 淞北台 ライフ

約50年前に建設された淞北台団地。その高齢化率は約40%、松江市を約10%も上回っているのに要介護率は市内平均を下回る。元気なお年寄りが多いということだ。聞くと、20年以上も前から「みんなで楽しく老いていこう」を合言葉に、住民が主体となってメニュー豊富な交流の場を団地内につくり、人と関わることで生きがいを持って暮らせるようなまちづくりに取り組んできたという。公民館より近く、気軽に活動に参加できるので、多くの住民が楽しんでいる。僕は、20年以上も前から、住民の未来を考え意見を聞きながら「ずっと住み続けられるまち」を自分たちでつくってきた淞北台の高齢者さん達はすごいな、と思った。

インタビュー 岩本さんに聞く！

Q 岩本さんが考える「住み続けられるまち」とは、どんなまちですか。

A 年齢を重ねても、ずっと人と関わり、つながりが保てるまちです。私は、「つながる・つなげる」をモットーに、人が地域社会とつながり、そこから様々な人とつながれるよう心がけています。

Q 地域の人がずっと住み続けられるように行っている取り組みを教えてください。

A リ・ホープによる移動や買い物支援、リホープストア、あたたかな器で家庭のような食事を届ける配食サービス・カフェ太郎で行う人々の交流、「お茶の間カフェ」などです。また、多くの相談窓口を設けて、誰もが小さな困りごとや悩みを気軽に話せるようにして、だれも取り残さないようにしています。

Q 今後始めたい取り組みやサービスなどはありますか。

A 新しく始める…というよりは、今、この地域の高齢者さんたちに喜ばれ、その人らしい生活や生き方をするために必要とされているリ・ホープの運行などの事業を、これから先も継続させていくことを大切に考えています。人員の確保、運営資金などをクリアしながら、持続可能なサービスにすることを、大事にしていきたいと思います。

編集後記

ぼくのまちには、高齢者の困りごとを解決するための様々な取り組みがあると知り、安心した。取材で高齢者さん達の優しさに触れ、あたたかい気持ちになった。僕が考える「住み続けられるまち」はいつまでも人と関わり、つながれるまち。困ったことを相談できて、助け合えるまちだ。